

第4節 東平1号墳出土鉄鏃の評価と意義

藤村 翔

はじめに

駿河東部地域の後・終末期古墳出土鉄鏃については、長三角形式や五角形式、三角形式に代表されるようなヴァリエーション豊かな平根系鉄鏃が目立つこと（井鍋 2003、長谷川 2003、藤村 2011）、20～30本以上の大量の鉄鏃を保有する古墳が数多く認められること（菊池 2016、大谷 2004、藤村 2017）などの特徴が先行研究でも指摘されている。また、古墳時代のものとしては東海地域唯一の鍛冶具を出土した中原4号墳のほか（鈴木 2016など）、鍛冶生産に関わる特殊遺物（祭祀具）としての性格が推定されている鉄鐸を保有する古墳も当地域に集中する状況から、小規模な鉄器製作や鉄鏃の地域生産が行っていた可能性も考慮しておく必要がある一方で（藤村 2017）、当地域の鉄鏃組成やその変遷を検討する分析は井鍋誉之氏の検討（井鍋 2003）以降調であり、近年になって目覚ましい調査成果が相次いで報告されている当地域の後・終末期古墳出土資

料を反映した編年を再構築する意義は大きい。

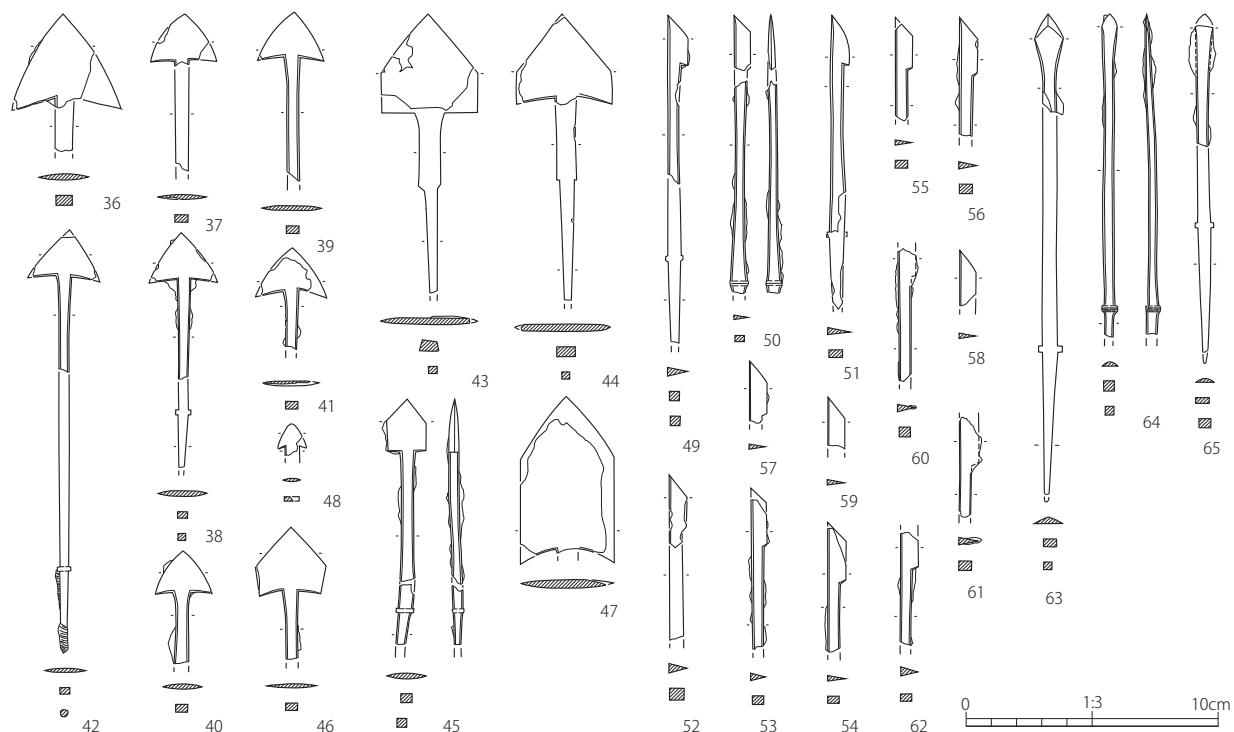
上記のような問題意識のもと、本稿では駿河東部地域における7世紀代の代表的な有力首長墳の一つであり、また計30点という比較的多量の鉄鏃を保有する東平1号墳の資料の特徴を整理し、当地域における鉄鏃組成の時間的推移のなかで本資料が有する意義を考えたい。

1 東平1号墳の鉄鏃組成とその特徴

（1）概要

東平1号墳の横穴式石室内から、平根系鉄鏃が12点、尖根系鉄鏃が18点、計30点の鉄鏃が出土している^{註1}。このうち、平根系鉄鏃は三角形式が7点、五角形式が5点、尖根鉄鏃は三角形式が1点、片刃箭式が14点、鑿箭式が3点を数える（第84図）。

平根三角形式（36～42）のうち、大型の36は鏃身部長3.8cm、鏃身部最大幅4.2cmを測り、平面形が正三角形に近く、浅い腸抉を有する。頸部以下が



第84図 東平1号墳の鉄鏃

欠損するが、本来は 43 のような短頸の平根鎌であつたと考えられる。36 を小型にしたような 37 ~ 42 は、いずれも鎌身部長が 1.8 ~ 2.0cm、鎌身部最大幅が 2.6 ~ 2.9cm に收まり、浅い腸抉を有する規格性の高い長頸鎌群である。頸部は判明しているもので幅 0.5cm 程度、長さ 5.5 ~ 11.7cm を測り、全長にはバラつきがありそうである。茎関が判明するものは、38 が棘関、42 は幅 0.1 ~ 0.2cm 程度の細い鉄棒を頸部に巻いて関を形成しており、円形関（水野 2003 など）に類似するが、断面方形の頸部に沿つて巻くので、断面は隅丸方形とみられる。本稿では類円形関と仮に呼んでおく。

平根五角形式（43 ~ 47）のうち、いわゆるホームベース形の 43・44 は鎌身部長が 3.6 ~ 4.0cm、鎌身部幅がともに 3.8cm を測り、頸部長も 3.0 ~ 3.2cm と類似するが、43 が腸抉がないのに対し、44 は浅い腸抉を有する。45・46 はともに長頸鎌とみられるが、45 が幅狭の鎌身部なのに対し、46 は幅広である。47 は鎌身部長 5.5cm、幅 3.7cm を測る大型の平根鎌であり、頸部以下が欠損しているのが惜しまれるが、平根系鎌のなかでも一際象徴性の高い位置づけの鎌であったと考えられる。茎関は 43 が撫関、44 が角関、45 が類円形関とみられる。

尖根三角形式とした 48 は、浅い腸抉を有する長頸鎌とみられる。

片刃箭式（49 ~ 62）は、確認できるものはすべて浅い逆刺を有する形態であるが、逆刺が鋭角のもの（49、51）と鈍角のもの（52 ~ 54、55 ~ 57、62）が混在する。鎌身部長はいずれも 2.0cm 程度であり、比較的短小である。茎関は 49・51 が棘関、50 が類円形関とみられる。

鑿箭式（63 ~ 65）は、鎌身部が片鎬造で丸みをもつ 63 と、片丸造で頸部との差が明瞭で無い 64・65 とが混在する。茎関は 63・65 が棘関、64 が類円形関とみられる。

（2）三角形鎌の特徴

短頸鎌 東平 1 号墳の平根三角形式鉄鎌でみられるような、幅広な鎌身部を有する資料については、後述する長頸鎌も含め、駿河東部地域の中でも富士川西岸～富士山南麓地域にまとまって分布する

特徴ある形態として注目されている（長谷川 2003、藤村 2011）。短頸鎌とみられる 36 の類例をみると、第 85 図上段に示したように、いずれもふくらの張る幅広な鎌身部を有し、法量も類似した製品が当地域で多く認められる。特に谷津原 16 号墳から中里 K-99 号墳、横沢古墳、国久保古墳の資料は類似性が高く、時期的にも遠江Ⅲ期後葉～末葉頃に収まることから、近しい工房で継続して製作されていた製品とみられる。これらの資料と比べると、東平 1 号墳例は一回り大きく腸抉が鋭角的な形態を採用しており、やや新しい様相とみてよい。Ⅳ期前葉以降に位置づけられそうである。

長頸鎌 幅広な鎌身部（平根）で腸抉を有する 37 ~ 42 の三角形式の長頸鎌は、駿河地域では富士川～富士山南麓地域を除くと、黄瀬川～狩野川流域の下土狩西 1 号墳や平石 4 号墳、安部川西岸の牧ヶ谷 4 号墳や志太地域の原古墳群谷稻葉支群高草地区 19 号墳でみられる程度の非常に限定的な分布を示す資料であるが（藤村 2011）、東日本全体に目を向ければ、内山敏行氏の指摘する「地域型式」^{（註2）}として、7 世紀中葉前後に東北南部まで分布が拡大する形態と共に通する（内山 2003）。分布が極めて集中する富士川西岸～富士山南麓地域の類例をみると（第 85 図）、遠江Ⅲ期末葉の谷津原 12 号墳で細身のもの（6）と幅広のもの（7）が登場して以後、国久保古墳や一色 D-35 号墳、室野坂 B-4 号墳で東平 1 号墳例と共に通する幅広のものが確認される。幅広のものは国久保古墳で 22 点、室野坂 B-4 号墳では 24 点用意されているので、一定量生産・流通されていたことが窺われよう。形態の細部をみると、谷津原 12 号墳例では短小・幅広であったものが、Ⅲ期末葉頃の国久保古墳の段階で正三角形に近い整った形態となり、以後、Ⅳ期後葉以降の一色 D-35 号墳例^{（註3）}や室野坂 B-4 号墳例にかけて腸抉が次第に鋭角化するという変化を捉えることが可能である。東平 1 号墳例は腸抉が直角ないしやや鋭角であり、国久保古墳例と一色 D-35 号墳例の中間的な様相を呈する。したがって、こちらもⅣ期前葉頃の所産とみて大過ない。

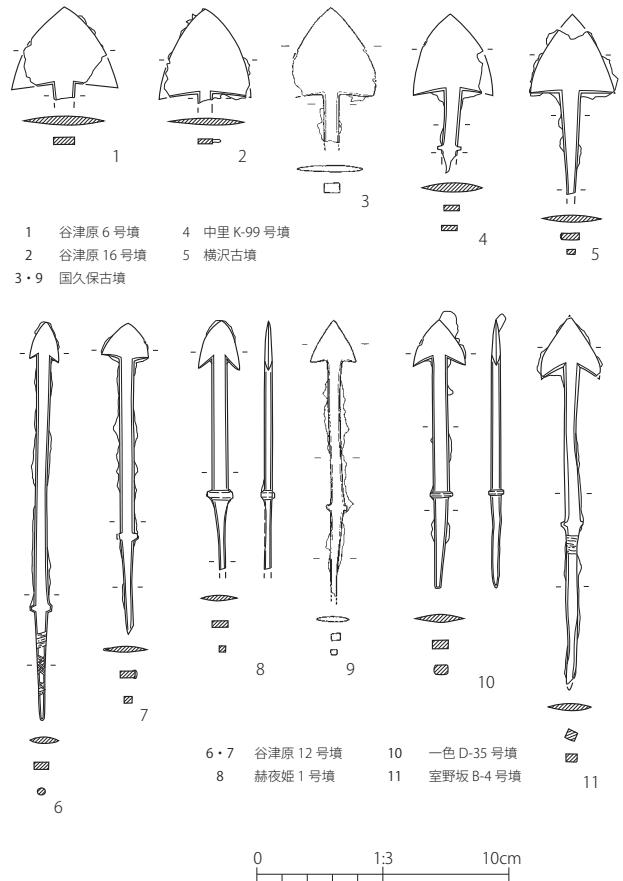
高い規格性 三角形鎌における短頸鎌、長頸鎌の形態は、大小の違いはあれ、相似形のよう相似してお

り、非常に規格性の高い組成と評価されよう。発注から生産・流通までが高度に統率されたなかで被葬者集団へと持ち込まれた可能性を想起させる資料である。

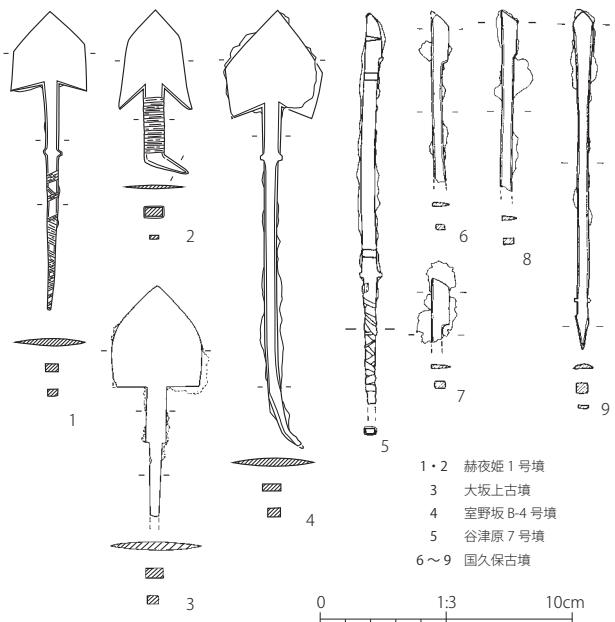
(3) 五角形鎌の特徴

定型的五角形鎌 遠江III期中葉以降、駿河西部以東の地域においては、平根五角形式が鉄鎌組成の中心的位置を占めるようになることが、長谷川睦氏によって指摘されている（長谷川 2003）。第88図に示したように、平根五角形短頸鎌は当地域で群集墳が盛行する時期を通じて存続しており、形態的には鎌身部長が次第に短く、幅が次第に長い、いわゆるホームベース形のものへと変化する。東平1号墳例（43・44）は典型的なホームベース形といえるものであるが、鎌身部の各辺が直線的なものも特徴である。第86図に示した赫夜姫1号墳例（1）や大坂上古墳例（3）はともにIV期前葉のものであるが、IV期後葉の室野坂B-4号墳例（4）では脇抉が鋭角化し、鎌身部幅が根元部分で窄まる形態となっている。東平1号墳例（43・44）については、IV期前葉に製作された定型的な一群とみてよいだろう。

五角形への指向 当古墳ではほかにも、類例のない特注的大型品の平根五角形鎌（47）があるほか、小型品（46）や長頸鎌（45）と、五角形鎌へのこだわりが強い組成となっている。おそらくは47が東平1号墳の鎌群のなかでは一際大きな象徴性を有した鎌であり、同種ながら様々な法量の五角形鎌が脇を固めたのであろう。ここにも、三角形鎌同様、発注から流通まで統率された中で集められた鎌群の特徴が垣間見える。駿河東部地域においては特に金銅装馬具などを有する上位階層の古墳で五角形鎌が選択されることが多いこと（菊池 2008）、さらに船津L-209号墳例のような無茎の五角形鎌を含め（大谷 2004）、一部の五角形鎌の生産自体が富士山南麓から愛鷹山南麓西部周辺で行われた可能性（菊池 2008）も指摘されているところであり、東平1号墳の被葬者がその生産や流通管理に一定の影響力を發揮していたことが想定される。



第85図 三角形式鉄鎌の諸例



第86図 五角形式・片刃箭鎌の諸例

(4) 片刃箭式の特徴

短小な鎌身部 尖根片刃箭式鉄鎌は、駿河東部地域の後・終末期古墳から出土する鉄鎌のなかでも普遍的な形式の一つであり、ほとんどの鉄鎌出土古墳で副葬されている。鎌身部に逆刺や角関・撫関があるものと、無関のものとがあり、後者が遠江III期末葉以降に増加することが指摘されている（大谷 2003b）。鎌身部に関を有するものについては、鎌身部長が 3.0～4.0cm 程度あるものが一般的な形態であるが、東平 1 号墳の鎌身部長は、2.0cm 前後と短小な形態をとることに特徴がある。このような短小な片刃箭鎌は、駿河東部地域では谷津原 7 号墳や国久保古墳に類例（第 86 図 5～8）がみとめられ、いずれの事例も富士川西岸～富士山南麓に集中していることから、当地域内で生産された可能性を想起させる（藤村 2011）。

「共有型式」のなかの地域生産品 片刃箭式や鑿箭式の長頸鎌（「共有型式」）は、畿内地域で生産され、列島各地の地域首長層へ搬入された製品が多いことが内山敏行氏によって指摘されているが、不足する分は在地生産分で補われた可能性もまた想定されている（内山 2003・2011）。同じ駿河東部地域でも、鑿箭式や片刃箭式、柳葉式といった「共有型式」長頸鎌の副葬が III 期中葉以降特に卓越する愛鷹山東麓～黄瀬川流域に短小な片刃箭鎌の類例がみられないことは、富士山南麓地域とは非常に対照的な現象である。両地域のこの差は、畿内地域との流通経路の粗密によるものか、あるいは逆に、地域内工房の成熟度によるものなのであろうか。即断しかねるが、富士山南麓周辺が平根五角形式や腸抉三角形式長頸鎌をはじめとする地域流通品に重きをおく鉄鎌副葬方式を採用したことと、間違なく軌を一にする現象として捉えておく必要があるだろう。

(5) 特殊な茎関について

類円形関 前述した通り、東平 1 号墳の鉄鎌の茎関の多くは、一部の平根五角形鎌を除いて棘関であるが、42・45・50・64 は幅 0.1～0.2cm 程度の細い鉄棒を頸部に巻いて造られたとみられる類円形関である。頸部～茎部破片資料では、80～86 が類円形関であり、報告書作成時点で確認できる茎関のなか

での割合は約 3.5 割を占める^(註4)。同種の茎関は遠江III期後葉以降、吹上 2 号墳（尖根柳葉式）や東原 5 号墳（尖根柳葉式）、横沢古墳（長三角形式・雁股式など）、赫夜姫 1 号墳（腸抉三角形式長頸鎌、第 85 図 8）、一色 D-35 号墳（腸抉三角形式長頸鎌、同 10）において実測図上では確認できるが、原資料の確認ができなかつたものもあり、検討の余地がある。また茎部の特殊な仕上げとして、国久保古墳で確認された扁平で逆三角形状の茎（第 86 図 9、藤村 2011）についても、未だ類例が少ないが注意される。これらについては、駿河東部地域における地域内生産の可能性を示す特徴として候補に挙げ、今後の良好な事例の増加を待ちたい。

2 駿河東部地域における

後・終末期古墳出土鉄鎌組成の変遷

(1) 鉄鎌組成分析の意義

鉄鎌組成への視点 駿河東部地域の後・終末期古墳出土鉄鎌をめぐっては、個別の形式の変遷観や分布論のみならず、その組み合わせや総量に関わる視点も重視されてきた。井鍋誉之氏は、多量の鉄鎌を有する古墳には平根鎌も多く揃えるような「多種多量タイプ」と、尖根鎌が主体となる「同種多量タイプ」が存在することを指摘し、それぞれの古墳被葬者層で異なる鉄鎌の流通経路を掌握していたことを想定した（井鍋 2003）。一方、菊池吉修氏は富士山南麓や愛鷹山南麓東側では規格性の高い多量副葬古墳（同種多量）が集中する点から、鉄鎌の集約・分配に関わる人格の存在を推定する（菊池 2016）。先学が指摘したような鉄鎌組成の傾向に基づけば、東平 1 号墳の組成は平根鎌が 11 点、尖根鎌が 19 点で両者がやや均衡するが、形式でいえば三角・五角・鑿箭・片刃箭をそれぞれ一定量揃えるので、「多種多量」の部類になるだろうか。

「平根指向」観念の変化を追う しかし、そもそも後・終末期の有力階層の古墳でよくみられると言われる「少量の平根」+「多数の尖根」という教科書的な組成が、必ずしもすべての有力古墳に貫徹されるわけではない（田村 2003）ということが確認されている中で、駿河東部地域では特に、平根鎌が重視される傾向にあることも指摘されているのであ

第11表 駿河東部の古墳出土鉄鎌構成

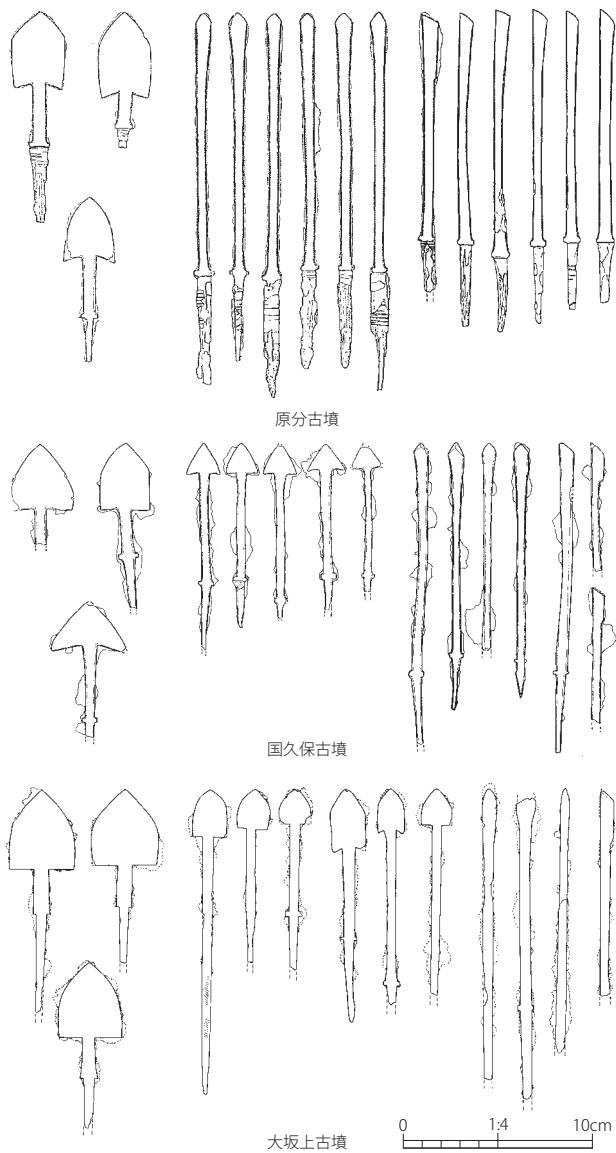
時期（遠江編年）	地 域	古墳名	無茎 短茎	平根系								尖根系						合計点数 (鎌身部)	両頭 金具	備考・共伴遺物		
				柳葉	撫問 三角	圭頭	方頭	長 三 角	五角	三角	飛燕	雁股	長三角	三角	五角	片 刃	鑿筋	柳葉 箭				
III期中葉	1	谷津原6号墳	2		2			18	1			3			4			27	23	34		
III期中～後葉	2	中原4号墳	2	4	3	3	1	27	3						34	13	7	43	54		銀象嵌装大刀・剣、 鉄鉗	
III期中～後葉 ※1	1	谷津原17号墳						1	2			1			5	4	14	3	24		銀装大刀	
III期中～後葉	3	清水柳北3号墳															41		41		有蓋脚付長頸壺	
III期中～後葉	3	中里K-97号墳	1					1									1	2	1			
III期中～後葉	3	中里K-98号墳	1	1								2			1		2	2	5			
III期中～後葉	1	谷津原7号墳						3				1			6	1	18	3	26		胡鎌、石突、鞍	
III期中～末葉	3	中里K-99号墳		1				3	1								8	5	8		金銅製切羽・責金具	
III期後葉	3	石川6号墳						5	1		1	11			1	1	5	7	18		脚付短頸壺	
III期後葉	2	中原3号墳	1					3	1			6			13	3	3	5	25			
III期後葉	1	谷津原8号墳										9					5		14		金銅製鞆尻金具	
III期後葉	3	寺ノ上1号墳						1	1			17			2	3	2	2	24		真珠製橐玉	
III期後葉	3	吹上2号墳													1	1	12		14	2	類円形閑	
III期後葉	5	天神洞1号墳										2			2	8			12			
III期後葉～	2	横沢古墳						2	2	2		1	2			7	2	1	7	12		
IV期前半																					金銅製装身具・銅鈴、 貝装帶金具・類円形閑	
III期後葉～	3	秋葉林1号墳	1					2	1		1				12	6		5	18	6	金銅装圭頭大刀 (尖根の茎閑数は26点)	
III期後葉～末葉	3	清水柳北2号墳													10		26		36		乳文鏡	
III期後葉～末葉	1	石川119号墳						3	5	2	1				4		2	11	6		銅鈴、金銅装大刀、 篠籠手	
III期後葉～末葉	6	夏梅木6号墳						3	1						4	5	1	4	10	3	金銅装大刀、金銅装刀 子、紡錘車棒軸	
III期後葉～末葉	3	東原5号墳										1					32		33		大刀5振、類円形閑	
III期後葉～末葉	1	谷津原15号墳	1					5				4			2		6	6	3			
III期後葉～末葉	1	谷津原16号墳							1			3	2	1	3	3		1	12		銀装大刀	
III期後葉～末葉	3	東原1号墳										1	1		4	2	9		17		貝装帶金具？	
III期末葉	3	中里K-95号墳	1					1				2	1	10	5	10		2	28		金銅装圭頭大刀	
III期末葉	1	谷津原12号墳						1	6	2	1	1		3				11	3	4		
III期末葉	1	谷津原2号墳						1			1		8		3	7	5	2	23			
III期末葉	3	の場3号墳	1					9	1			11			5	4	6	11	26	4	鉄鐸	
III期末葉	6	夏梅木9号墳													6	1			7		銅鉗	
III期後葉～	3	須津J-6号墳													8	5			13		針	
IV期前葉																						
III期末葉～	4	原分古墳							2	1					16	22		3	38	17	家形石棺、金銅装大刀・ 銀象嵌装大刀、金銅装 馬具	
III期末葉～	2	国久保古墳						1	24	1					4	23		26	27		銀装大刀、鉄鐸、 雁木玉	
IV期前葉	※1	3	井出1号墳					1		5					2			6	2		金銅製棺座金具	
IV期前葉	4	下土狩西1号墳						3		4			6			1	1	7	8	2	家形石棺、 金銅装頭椎大刀	
IV期前葉	2	赫夜姫1号墳						1	1	14	1	1	2					18	2		紡錘車、類円形閑	
IV期前葉	3	須津J-159号墳						2	3	5	1				5		11	5	6		鉄製鷄目金具・刀装具	
IV期前葉	2	大坂上古墳						5	3						1	3		8	4	4	金銅装方頭大刀	
IV期前葉	2	東平1号墳							4	7					1	1	14	3		11	19	1 銀象嵌装大刀、丁字形 利器、金銅装馬具、類 円形閑
IV期前葉	3	船津L-62号墳	2					1		2	3		1	8		4	1	6	1	9	20	6 銅装馬具
IV期前葉	3	石川22号墳									4							4				
IV期前葉	1	室野坂B-4号墳							1	24					11			25	11		銀象嵌装責金具	
IV期後葉	※1	2	一色D-35号墳							5							5				銚帶金具、銅装鞆尻金 具、銀装刀子、類円形 閑	
V期	1	妙見I-2号墳						1		3						13	4	13			有蓋短頸壺	

凡例

時期 ※1：築造時期の参考となる遺物が少ない

地域 1：富士川西岸 2：富士山南麓 3：愛鷹山南麓 4：黄瀬川流域 5：狩野川流域 6：箱根山西麓

合計点数：平根の合計点数は、無茎・短茎を含む。



第 87 図 鉄鎌構成の類例（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉）

り（長谷川 2003 など）、畿内地域の首長墳で指摘される尖根への指向性よりは、同地域の群集墳層にみられる平根への指向性（豊島 2002）と共に通する部分が大きいと考える。そうであるならば、平根系鎌を重視する古墳における鉄鎌組成の時間的推移を明らかにすれば、「同種多量」・「多種多量」の議論から一步進めて、鉄鎌に対する考え方を比較的共有する集団の中で、鉄鎌への観念がいかに変化したのか、またその組成自体にどのような指向性が働いたのかを検証することも可能になってくるのではないだろうか。そのような過程を経ることで、初めて東平 1 号墳の鉄鎌組成が評価しやすくなると考える。

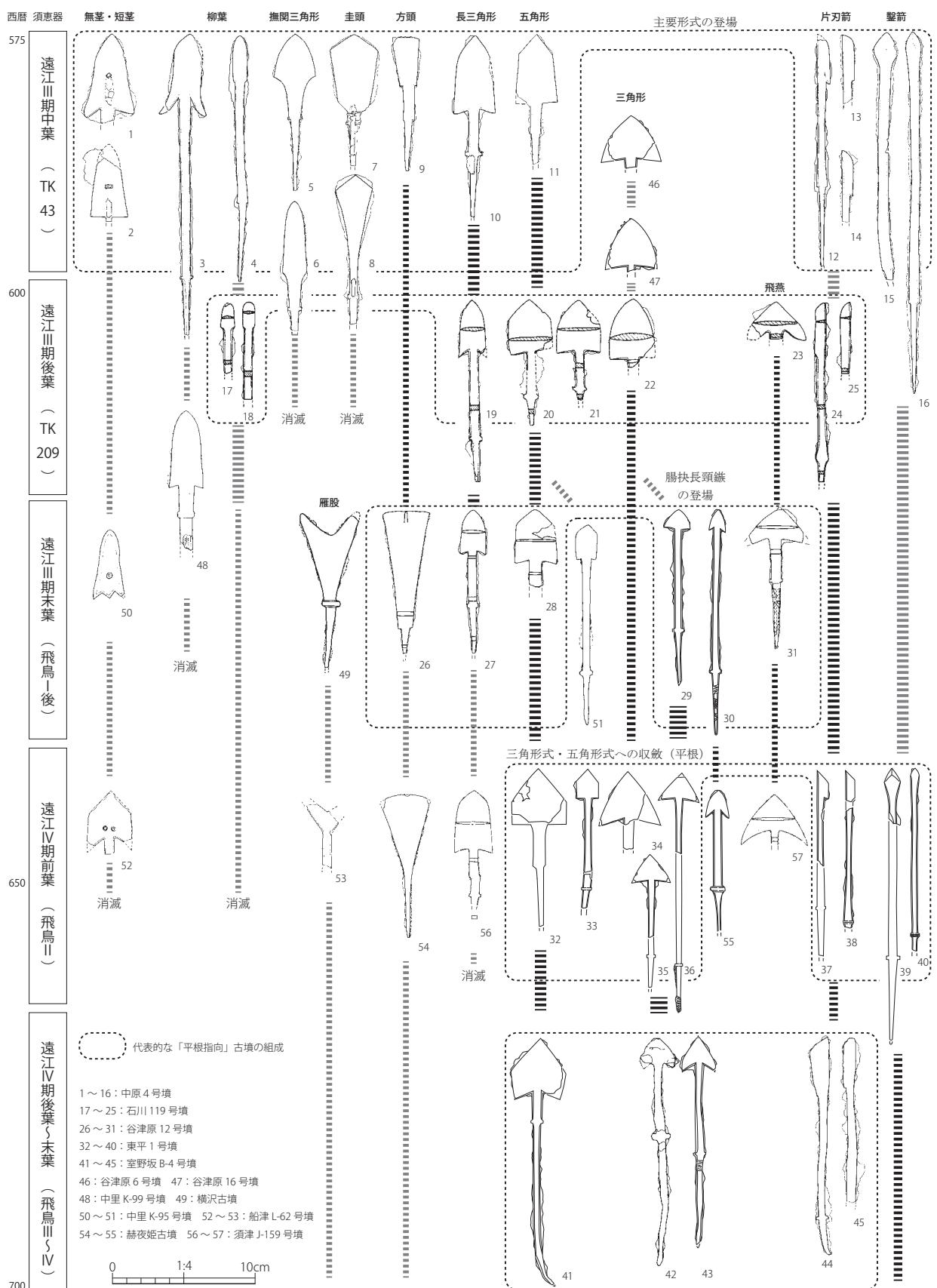
上記の問題意識のもと、駿河東部から一部伊豆地

域を含む主要な鉄鎌出土古墳を集成し、各鉄鎌形式の出土点数や共伴遺物を時期別に示した（第 11 表）。鉄鎌の数量を求める際に、他の副葬品の時期や鉄鎌型式の細分によって初葬・追葬を分けてカウントすることは理論上可能であるが、資料操作によって異なる結果を導く危険性もある（内山 2011）。現状の研究水準では悉皆的に埋葬单位別の鎌群を抽出することは困難なことから、同一埋葬施設出土の鎌を集計している。

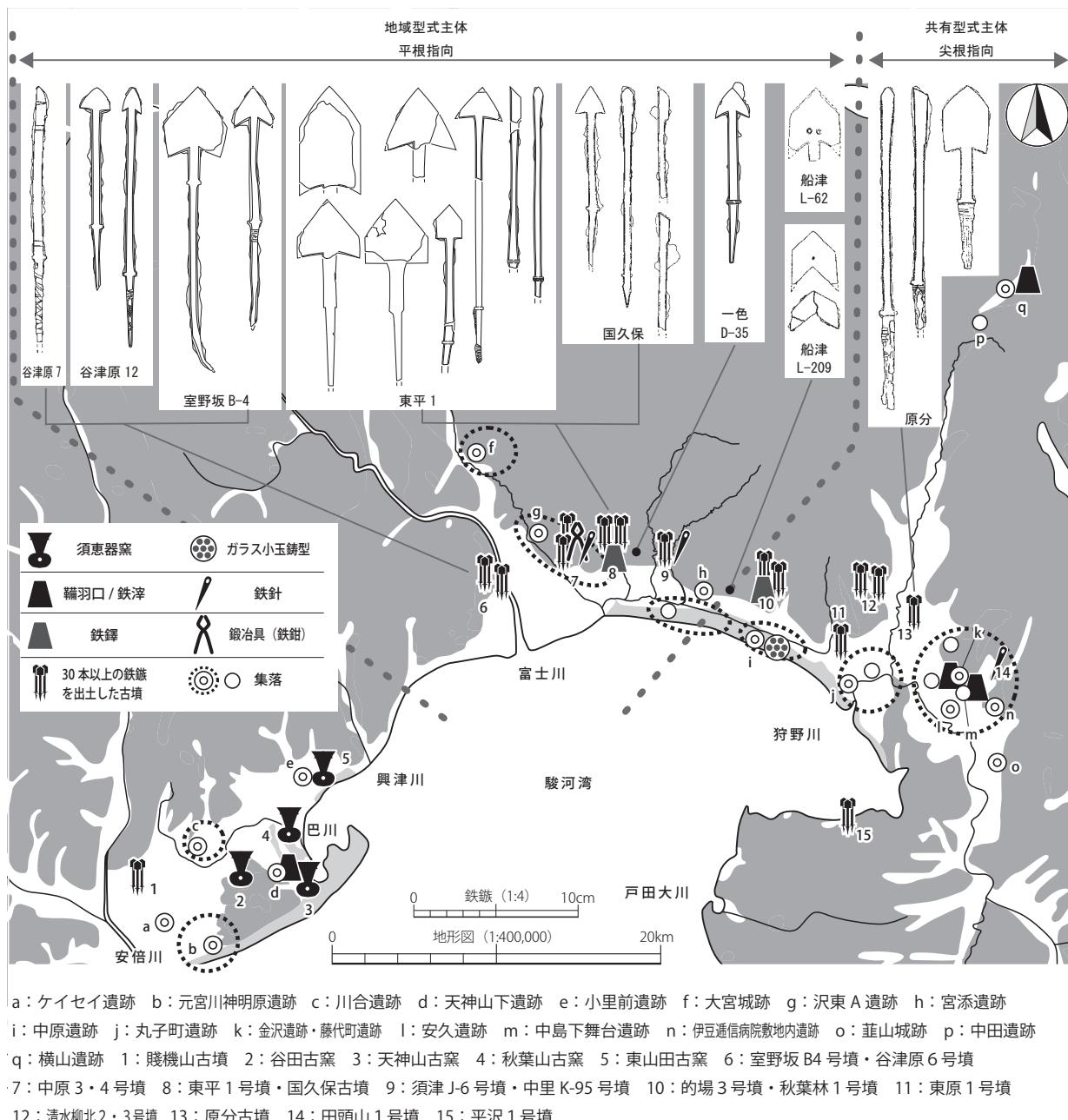
（2）鉄鎌組成の変遷

遠江Ⅲ期中葉～後葉 第 11 表および主要な「平根指向」古墳の鉄鎌組成をまとめた第 88 図を見るに、まず時期が新しくなるにつれ、副葬鉄鎌の種類が少なくなっていくことがわかる。遠江Ⅲ期中葉（TK43 型式併行期）頃の中原 4 号墳や谷津原 6 号墳の段階で、律令的形式ともよばれる雁股式や飛燕式を除くほぼすべての形式が出揃っており、以後の当地域の副葬鉄鎌の展開は、ほぼこの段階である程度方向付けられたと言ってよい。具体的には、平根系鎌の長三角形式・五角形式・三角形の主要 3 種が現れ、これらはⅢ期末葉（飛鳥 I 後半）頃までの「平根指向」古墳の必須形式となっている。特に中原 4 号墳の鉄鎌は「多数の尖根+多種多量の平根」といえるものであり、「多数の尖根+少数の平根」という古墳時代中期後半以降顕在化する一般的な鎌構成（田村 2003 など）に、「多種の平根」という駿河東部地域の特徴が加わり、さらに、鉄鎌の生産や流通に携わる立場にあった被葬者が、西日本各地との交流や平根鎌の有する象徴性を重視して集めた結果成立したと考えられている（菊池 2016）。しかしながら、中原 4 号墳の被葬者が達成した「平根鎌を多数揃えるという指向性」こそが、駿河東部地域の一定の集団に大きな影響を与えたと考えたい。

遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉 そのような組成にも、Ⅲ期末葉からⅣ期前葉（飛鳥 I 後半～II）を期に、変化が訪れる。原分古墳や国久保古墳、東平 1 号墳、大坂上古墳といったいづれも装飾付大刀あるいは金銅装馬具といった副葬品を有する有力古墳において、平根長三角形式がみられなくなり、平根系鎌の主要形式が、五角形式と三角形式に収斂されるの



第88図 駿河東部地域の後・終末期古墳における鉄鎌組成の変遷



第89図 駿河・伊豆地域の手工業関連遺跡と地域型式鉄鏃の広がり

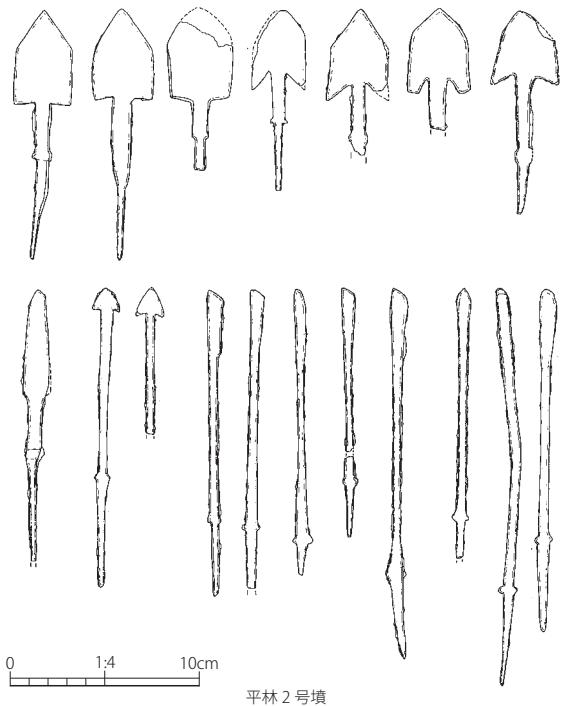
である（第87図）。無論、同時期のすべての古墳において達成されたのでは無く、他の形式を依然副葬する有力古墳も少なからず存在するのであるが、「平根指向」の集団内にも平根の種類を厳選する指向性が表出したことを評価したい。特にIV期前葉には東平1号墳例のような定型的なホームベース形の平根五角形式が創出され、五角形式が「地域の顔」としての様相を帯びてきただことが推察される。

終末期古墳の鉄鎌と地域生産 それでは、鉄鎌形式が収斂されるという現象は、どのような背景によつて行われうるのであろうか。一般的に、7～8

世紀にかけての鉄鏃は、鏃身部が矮小化した鑿箭、片刃箭といった尖根系鉄鏃と、方頭式、飛燕式、雁股式、長三角形式、柳葉式といった平根系鉄鏃との組み合わせが基本となり、列島中央部から東日本地域で共通性が高い形態へと収斂されるが（津野 1990）、こうした背景には、中央で設計された見本（様《ためし》）を参考に、列島各地で鉄鏃の生産が活発化した結果と考えられている（津野・内山 2017）。特に、鑿箭・片刃箭が王権中枢から地域首長層を中心配布された「共有型式」として捉えられる一方、三角形式などの腸抉長頸鏃や三角形式・五角形式な

どの平根系鎌は東海～東日本各地で製作され、中小古墳を中心に供給された「地域型式」として認識される（内山 2003・2011）。後の郡家につながる地域拠点において鉄器の地域生産が活発化する中、平根系に代表されるような鉄鎌の象徴性は薄れ、日常的・実用的な武器としての側面が強調されるようになつていったと考えられているが（鈴木 2003）、そうであるならば、当地域において東日本的な象徴性を帶びた無茎式・短茎式が消失し、平根系が五角形式と三角形式を中心とする組成に収斂していくことは、やはり鉄鎌の地域生産と密接に関わった現象と捉えられる。先に筆者は、鉄鎌を多量に保有したり、鉄鉗・鉄鐸といった鍛冶関連遺物を副葬したりする古墳や、鍛冶関連遺物が出土した集落の分布から、駿河東部地域において6世紀後葉から7世紀にかけ、鍛冶関連の手工業生産が発達した状況を想定したが（藤村 2017）、鉄鎌組成の変遷からは、7世紀中頃を前後する時期に、鉄器生産上の第二の画期が到来したことが想定されるのである（第89図）。7世紀後半以降にはそうした鉄鎌形式収斂の流れは一層押し進められ、雁股・方頭・五角形・三角形・片刃箭・鑿箭のいずれかを複数選択する少種組成に変化する。この段階を律令的鉄鎌組成の完成とみるのであれば、7世紀中頃前後から始まる鉄鎌組成の収斂化の波も、後の郡家につながるような地域拠点を中心とする地域生産の成熟と進展の文脈で捉えてよいだろう。

軍事的観点からの評価 また、7世紀中頃にみられる「共有型式」の片刃箭・鑿箭と、東国の「地域型式」である腸抉三角形式長頸鎌と平根五角形式短頸鎌によって構成される鎌群については、岡安光彦氏が信濃・甲斐・駿河地域を中心に編成された「東国舍人騎兵」の鉄鎌として評価している（岡安 2013）。岡安氏が「甲斐の勇者」の古墳と認める平林2号墳の鉄鎌組成は、平根五角形式、尖根片刃箭式・鑿箭式に腸抉長頸鎌が加わるもので、当地域とも共通点が多い（第90図）。鉄鎌組成以外にも、駿河東部地域をめぐっては、石室規模の大小や装飾付大刀の保有などによる階層分化が発達した古墳群の並立（藤村 2016）や鉄器生産・紡織・皮革加工などの各種手工業の展開（鈴木 2016、藤村 2017）、馬



第90図 甲斐地域における有力階層の鉄鎌組成

匹生産の可能性（大谷 2016）、交通上の拠点としての地域開発（菱田 2018）など、さまざまな論点が提示されているが、これらの諸特徴について、軍事的側面も考慮した評価も検討していくべきなのかもしれない。後の東海道と東山道を結ぶジャンクションとしての役割を有した富士山南麓地域は、畿内の王権からみれば、後の清見関のすぐ外側、東国経営の最前線ともいえる軍事的要衝の地として捉えられる。農耕生産の基盤も十分とは言いがたい当該地において、百基単位の群集墳が複数並立する背景には、有事の際には自前で装備を調べ、兵として出奔できる生産技術を保有した集団が複数存在していた可能性を想定しておくことも必要であろう。

3 東平1号墳出土鉄鎌の意義

前節までにおいて、東平1号墳出土鉄鎌の形態的特徴と駿河東部地域における鉄鎌組成の変遷についてみてきた。それらの成果を基に、本節では東平1号墳出土鉄鎌の意義と被葬者像について検討し、まとめに替えたい。

帰属時期 個別の鉄鎌についてその特徴と駿河東部地域内の類例から判断される帰属時期を述べてきた。まず帰属時期については、平根三角形式、腸抉三角形式長頸鎌、平根五角形式の形態から、遠江IV

期前葉（飛鳥II）頃と捉えた。追葬も当然想定しておくべきではあるが、鉄鏃の形態的特徴からは、積極的に時期差を導く型式差を抽出することはできない。三角形式や五角形式にみられた規格性からも、鏃束の別はあったとしても、初葬者の生前の権力や生産基盤、交流網を象徴するために、大きくは一括で用意された鏃群と判断してよいだろう。

鉄鏃生産と流通の掌握 五角形式や短小な鏃身部の片刃箭長頸鏃は在地における鉄器生産の可能性を示唆する。また東日本で広域的な「地域型式」である平根腸抉三角形式長頸鏃の存在は、そのような地域内生産が東日本各地との情報共有のなかで成熟していく過程を推察させる。鉄鏃組成の観点からは、6世紀後葉以降のそれとは大きく異なり、平根系が五角形式と三角形式に収斂され、かつ腸抉三角形式長頸鏃も取り入れた新しいスタイルであり、当古墳の被葬者がそうした新様式を積極的に推進した発信源たる指導者の一人であった可能性も指摘される。

伝法古墳群の系譜 東平1号墳が所在する富士山南麓地域の伝法古墳群内には、遠江III期中葉（TK43型式併行期）に東海地域では極めて希少な鍛冶具を副葬する中原4号墳が築かれ（鈴木2016）、その後もIII期末葉（飛鳥I後半）には、やはり鉄器生産と関連する祭具とされる鉄鐸や渡来系集団とのかかわりを示唆する雁木玉を副葬する国久保古墳の存在が確認されている（藤村2011）。7世紀中頃のIV期前葉（飛鳥II）段階に伝法古墳群の最上位階層の地位にあった東平1号墳の被葬者は、こうした系譜を引く鉄器生産技術者集団を直接あるいは間接的に管理する立場にあり、自身の築いた東日本諸地域との広域ネットワークを背景として、鉄鏃新様式の創出にみられるように、その生産力をさらに向上・展開させていったことが推察される。そして、そのような指導力を発揮するに至った背景に、後の東海道と、東山道へとつながる中道往還の結節点に位置する伝法古墳群の集団の長として、駿河東部地域の集団間における軍事的結束の一翼を担ったことも想定できるかもしれない。

おわりに

雑駁ではあるが、東平1号墳出土鉄鏃をめぐる問題とその特徴・意義について述べてきた。東平1号墳は、畿内の王権から下賜されたとみられる銀象嵌装大刀や銅製壺燈といった東日本諸地域に遍在する副葬品の存在から、王権から重要視されていた東国最前線たる地域指導者の姿をうかがうことができる（本書、大谷論考）。また丁字形利器の存在からは、渡来系集団の系譜を着実に受け継いだ被葬者の姿も想定される（同、佐藤・鈴木論考）。

鉄鏃の分析では、上述した広域的ネットワークを背景として、駿河東部地域やさらにローカルな富士山南麓地域において、東平1号墳の被葬者がいかなる役割や影響力を發揮したのかを描き出すことが、少なからずできたのではないだろうか。地域型式主体・平根指向の古墳の分布域は後の富士郡に、共有型式主体・尖根指向の古墳分布域は後の駿河郡や伊豆国に相当し、畿内の王権とのかかわり方の違いが、律令期以後の地域発展の方向性にもかなりの影響を与えたことが予想される。この点は、今後の地域研究にとって、重要な視座となるだろう。

以上のように、重層的な古代の交流関係や複雑な地域社会を鮮明に描くことのできる可能性を秘めた東平1号墳の副葬品群は、当市のみならず、県内外の古墳時代研究にとっても重要な価値を有した一級の資料群として、今後のさらなる活用が期待されるものである。

註

- 1 鉄鎌の形式分類については、基本的に静岡県の鉄鎌集成（大谷 2003）に即した。広域的な鉄鎌研究との対比から特に長頸鎌・短頸鎌と呼称する場合、前者は頸部長が鎌身部長の2倍以上あるものを、後者は2倍未満のものをそれぞれ指す（尾上 1993）。
- 2 内山敏行氏は2003年の論文では東日本の「専有型式」と呼称したが（内山 2003）、後に「地域型式」と改めている（内山 2011）。
- 3 一色D-35号墳は未報告資料であるが、富士市文化振興課に資料が保管されている。銅製鎧帶金具の鉈尾も出土しているためV期（平城）まで時期が下降する可能性もあるものの、方頭大刀に伴う銅製鞘尻金具（八木 2003のB鎌形《細》）に伴うとみれば、IV期後葉～末葉（飛鳥III～IV）の範囲で捉えられる。
- 4 東平1号墳の鉄鎌は、本報告中でも述べられたとおり、概報作成時から現在までに破損・散逸してしまった個体が一定量存在するが、実測図は概報時の外形を基に復元している（第84図38・42・43・44・49・51・63・65）。現在までに破損した頸部～茎部破片の一部は本報告第40図（武器実測図8）に示した資料の中に含まれると考えられるが、同定は困難であった。したがって、公表した実測図の茎関数では二重カウントのおそれがあることから、現在（本報告時）確認できる茎関数（26点）から同様に現在確認できる類円形関数（9点）の割合として、導いた。

参考文献

- 井鍋 誉之 2003「富士川西岸～箱根西麓地域」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』第10号（特集：古墳時代後期の鉄鎌）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 内山 敏行 2003「古墳時代終末期の長頸鎌—東日本における棘関長頸腸抉鎌の評価—」『七世紀研究会シンポジウム 武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会
- 内山 敏行 2011「後期・終末期古墳出土の鉄鎌—東日本の場合—」『月刊 考古学ジャーナル』No.616（特集：後・終末期古墳出土の武器）
- 大谷 宏治 2003a「地域区分、時期区分と鉄鎌分類」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』第10号（特集：古墳時代後期の鉄鎌）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷 宏治 2003b「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鎌の変遷とその意義」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』第10号（特集：古墳時代後期の鉄鎌）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷 宏治 2004「東と西の狭間—古墳時代後期の鉄鎌にみる東海・甲信地域の特質—」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 設立20周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷 宏治 2016「中原4号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被葬者の性格」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告 第59集 富士市教育委員会
- 尾上 元規 1993「古墳時代鉄鎌の地域性—長頸式鉄鎌出現以降の西日本を中心として—」『考古学研究』40(1) 考古学研究会
- 岡安 光彦 2013「壬申の乱における兵器と兵士—考古学的検討—」『土曜考古』第35号（特集：武器・馬文化）土曜考古学研究会
- 菊池 吉修 2008「原分古墳出土の鉄鎌について」『原分古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第184集（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 菊池 吉修 2016「中原4号墳出土鉄鎌について」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告 第59集 富士市教育委員会
- 鈴木 一有 2003「副葬鎌の変質」『七世紀研究会シンポジウム 武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会
- 鈴木 一有 2016「中原4号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告 第59集 富士市教育委員会
- 田村 隆太郎 2003「副葬鎌群への指向」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』第10号（特集：古墳時代後期の鉄鎌）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 津野 仁 1990「古代・中世の鉄鎌」『物質文化』物質文化研究会
- 津野 仁・内山 敏行 2017「武器・武具・馬具」村上恭通編『モノと技術の古代史 金属編』吉川弘文館
- 豊島 直博 2002「後期古墳出土鉄鎌の地域性と階層性」『文化財論叢』III 奈良文化財研究所
- 長谷川 瞳 2003「静岡県における鉄鎌の地域色と生産・流通」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』第10号（特集：古墳時代後期の鉄鎌）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 菱田 哲郎 2018「6・7世紀の手工業生産と地域の編成」『中原第4号墳の被葬者に迫る』平成29年度中原第4号墳出土品市指定文化財記念シンポジウム 富士市・富士市教育委員会
- 藤村 翔 2011「国久保古墳の評価と被葬者像」『平成13年度 富士市内遺跡・伝法 国久保古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 藤村 翔 2016「中原4号墳の横穴式石室とその歴史的意義」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告 第59集 富士市教育委員会
- 藤村 翔 2017「駿河・伊豆地域における手工業技術の受容と集落動態—6・7世紀を中心に—」『東海における古墳時代の手工業生産の展開を考える』考古学研究会東海例会
- 八木 光則 2003「7・8世紀鉄刀の画期と地域性」『七世紀研究会シンポジウム 武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会

図の出典

第 84 図 本書

第 85 図 1・2・4・5～8・10・11：筆者実測、小田貴子製図、
3・9：富士市教育委員会 2011 『平成 13 年度 富士市内遺跡・
伝法 国久保古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書』

第 86 図 1・2・4：筆者実測、小田貴子製図、3：富士市教育委員会 1988 『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』、5：（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001 『富士川 SA 関連遺跡（遺物編）』、6～9：前掲・富士市教育委員会 2011

第 87 図 原分古墳：（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『原分古墳』、国久保古墳：前掲・富士市教育委員会 2011、大坂上古墳：前掲・富士市教育委員会 1988

第 88 図 1～16：富士市教育委員会 2016 『伝法 中原古墳群』、17～25：沼津市 2002 『沼津市史 資料編 考古』、26～28・31：前掲・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001、29・30・41・43・46・47：前掲・筆者実測、32～40：本書、42・44・45：富士川町教育委員会 1994 『室野坂古墳群』、48・50・51・54・55：前掲・富士市教育委員会 1988、52・53：富士市教育委員会 2013 『船津古墳群 II』、56・57：（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『富士山・愛鷹山麓の古墳群』

第 89 図 谷津原 7 号墳：前掲・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001、谷津原 12 号墳・室野坂 B-4 号墳・一色 D-35 号墳：前掲・筆者実測、東平 1 号墳：本書、国久保古墳：前掲・富士教育委員会 2011、船津 L-62 号墳：前掲・富士市教育委員会 2013、船津 L-209 号墳：富士市教育委員会 1999 『船津古墳群』、原分古墳：前掲・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008

第 90 図 山梨県埋蔵文化財センター 2000 『平林 2 号墳』